

## 高照神社の宮付小人の神社業務と生活の様相

—青森県史編さんグループ蔵「葛西家文書」の紹介を通じて—

青森県立鰺ヶ沢高等学校 臨時講師 蔦谷 大輔

高照神社は正徳元年（一七一）から二年にかけて建立された弘前藩四代藩主津軽信政を祀る神社である。社領として三〇〇石が与えられ、神社門前には宮付小人が集住した高岡集落が形成された。本発表では、平成二十五年に青森県史編さんグループが購入した「葛西家文書」の紹介を行い、それを通じて近世期の宮付小人の神社業務や生活の様相について検討する。葛西家は、高岡集落形成時から同所に居住し、小人頭を務めた家柄である。

宮付小人の業務は、境内開発と神社の維持管理の大きく二つに分けられる。境内に田畑を開き、収納されたものを神供米として活用するなどをしていた。神社の維持管理については、神馬の管理、建物の修繕、入用材確保のための植林、人夫への賃金支給などを行っていた。特に祭事にかかる道具類の修理や新調は重要事で、徹底したチェックを行って藩に手配を願っていた。

宮付小人の多くは、享保年間に百沢村から召し抱えられた人びとであった。宮付小人を任されることで藩から給禄を受け、田畑の年貢は十年間の鍬下年期となったほか、帯刀も許されていた。しかし、天保飢饉のころには高岡祭祀下役宛に拝借米を願い出るなど借米や借金が繰り返され、返済不能に陥って土地を売却するなど、生活は決して楽ではなかった。しかしそれでも宮付小人の役目を務め続けたのは、津軽家や藩の心の拠り所である高照神社に勤仕することが自らの存在意義として認識されていたためではないだろうか。